

十・十空襲と学徒隊

第32軍は戦力を補うために「防衛召集」を実施、17歳～45歳の男子約2万5,000人を組織するとともに、中学生も「鉄血勤皇隊」や「衛生勤務員」として組織されました。鉄血勤皇隊は中学校の男子学徒を中心とする学徒隊で、女子生徒からなる衛生勤務員は、学校別に「ひめゆり学徒隊」「瑞泉学徒隊」などと呼ばれました。沖縄県全体で少なくとも男子学徒1,513人が動員されて810人が戦死、女子学徒は505人動員されて189人が戦死したと言われます。



1945年3月23日、米軍の沖縄上陸作戦開始によって「ひめゆり学徒隊」に動員令が下された。写真は1944年春の沖縄師範女子部の生徒たち(写真カラー化：東京大学大学院 渡邊英徳研究室／出典：アメリカ公文書館)



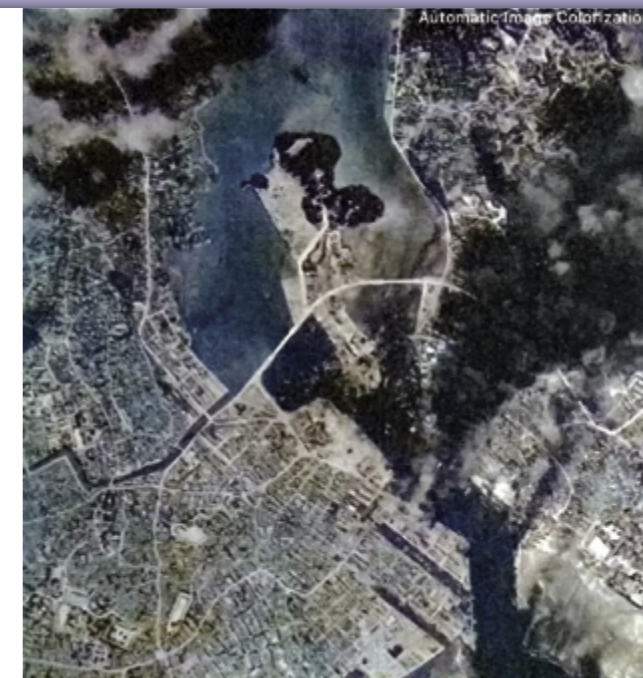
兵器をつくるために日本軍に徴用されていた14歳の少年。米兵から英語をならっている(沖縄県公文書館所蔵)



十・十空襲で燃える那覇市の港湾施設(写真カラー化：東京大学大学院 渡邊英徳研究室／出典：アメリカ公文書館)



空母フランクリンの艦載機が写した燃えあがる那覇市の港湾施設(写真カラー化：東京大学大学院 渡邊英徳研究室／出典：アメリカ公文書館)



十・十空襲で那覇の街の9割が焼け、5万人が焼けだされた(写真カラー化：東京大学大学院 渡邊英徳研究室／出典：アメリカ公文書館)

1944年10月10日の沖縄の空襲

十・十空襲(沖縄本島)

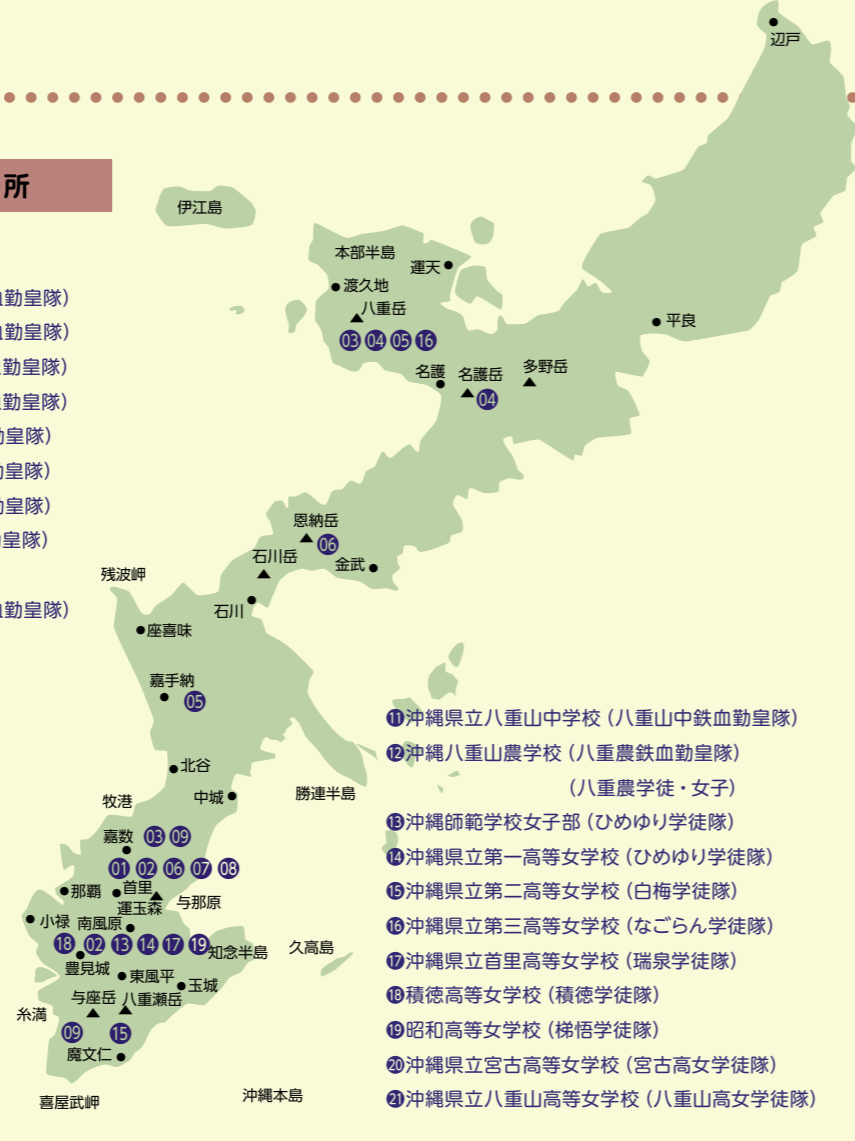
攻撃回	時間	攻撃機の数	攻撃場所
第1次	6時40分～8時20分	延約240機	飛行場攻撃
第2次	9時20分～10時15分	延約220機	船舶及び飛行場攻撃
第3次	11時45分～12時30分	延約140機	那覇・渡久地・名護・運天港・与那原・泡瀬などの各港湾施設攻撃
第4次	12時40分～13時40分	延約130機	那覇市へ集中攻撃
第5次	14時45分～15時45分	延約170機	那覇市へ集中攻撃

沖縄本島のほか、大東島・宮古島・石垣島・奄美大島・徳之島にも来襲
 参考図書 太田昌秀『那覇10.10大空襲——日米資料で明かす全容』(久米書房)、防衛庁防衛研修所戦史室『沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社(戦史叢書)

学徒隊について

学徒隊の配置場所

- ① 沖縄師範学校男子部 (師範鉄血勤皇隊)
- ② 沖縄県立第一中学校 (一中鉄血勤皇隊)
- ③ 沖縄県立第二中学校 (二中鉄血勤皇隊)
- ④ 沖縄県立第三中学校 (三中鉄血勤皇隊)
- ⑤ 沖縄県立農林学校 (農林鉄血勤皇隊)
- ⑥ 沖縄県立水産学校 (水産鉄血勤皇隊)
- ⑦ 沖縄県立工業学校 (工業鉄血勤皇隊)
- ⑧ 那覇市立商工学校 (商工鉄血勤皇隊)
- ⑨ 開南中学校 (開南鉄血勤皇隊)
- ⑩ 沖縄県立宮古中学校 (宮古鉄血勤皇隊)



- ⑪ 沖縄県立八重山中学校 (八重山中鉄血勤皇隊)
- ⑫ 沖縄八重山農学校 (八重農鉄血勤皇隊)
(八重農学徒・女子)
- ⑬ 沖縄師範学校女子部 (ひめゆり学徒隊)
- ⑭ 沖縄県立第一高等女子学校 (ひめゆり学徒隊)
- ⑮ 沖縄県立第二高等女子学校 (白梅学徒隊)
- ⑯ 沖縄県立第三高等女子学校 (なごらん学徒隊)
- ⑰ 沖縄県立首里高等女子学校 (瑞泉学徒隊)
- ⑱ 積徳高等女子学校 (積徳学徒隊)
- ⑲ 昭和高等女子学校 (梯悟学徒隊)
- ⑳ 沖縄県立宮古高等女子学校 (宮古女学徒隊)
- ㉑ 沖縄県立八重山高等女子学校 (八重山高女学徒隊)



ひめゆり学徒隊員のめがね
(南風原の第二外科壕で収集／
写真提供：ひめゆり平和祈念資料館)

● 石垣島



● 慶良間諸島



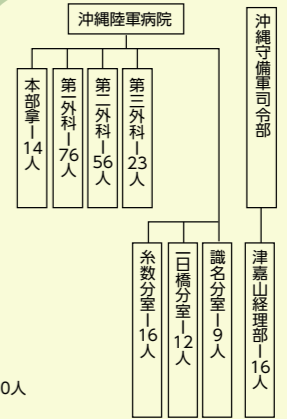
(『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック』を参考に作成)

ひめゆり学徒隊の配置場所



ひめゆり学徒隊員の持ち物だった洗面用具
(南風原の第二外科壕で収集／
写真提供：ひめゆり平和祈念資料館)

軍医	13人
見習士官	36人
衛生兵	82人
看護婦	82人
雑仕婦	12人
警備兵	117人
計	342人
ひめゆり学徒隊	240人
(教師18人+学徒222人)	



(『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック』を参考に作成)

学年でちがうひめゆりの髪型

自由だった髪型が1941年から学年ごとに定められた
(『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック』を参考に作成)



中部戦線

嘉数高地での激戦

1945年4月9日

1945年4月9日、首里に向かうアメリカ軍は、首里からわずか4km手前に位置する嘉数高地の日本軍に激しい攻撃を加えはじめました。4月12日、第32軍は、できるだけもちこたえろという「持久戦法」の方針とは違う、大規模な夜間攻撃をしかける戦法をとり、大きな損害を受けました。司令部の内部で意見の対立があったのです。

アメリカ軍は戦車を増強する一方、激しい空爆を加え、4月14日～17日、500トン近い爆弾、3,400発のロケット弾、70万発をこえる機関銃砲弾を撃ち込みました。その上、新たに火炎放射器による攻撃もしかけました。火炎放射器は高温で燃える液体をジェット流のように噴出して人間を焼き殺す恐ろしい兵器です。

そして、4月19日、アメリカ軍は「鉄の暴風」と呼ばれるものすごい攻撃をはじめました。しかし、それでも日本軍が潜んでいる地下壕は攻めにくく、アメリカ軍も攻めあぐねていました。

日本軍は速射砲や高射砲で攻撃しただけでなく、爆雷箱をかかえた歩兵が敵の戦車に体当たりするという無謀な戦術さえとりました。第32軍の司令部は、特攻機の兵士には「一機一艦船」、

特攻艇の兵士には「一艇一船」、そして歩兵には「一人十殺一戦車」を合言葉にしていたのです。

1945年1月27日付の『沖縄新報』によれば、日本軍は、沖縄県民の心構えとして、「ただ軍の指導を理屈なしに素直に受け入れ、全県民が兵隊になること」を要求し、「一人十殺」を「沖縄県民の決戦合言葉」にするよう主張していたのです。

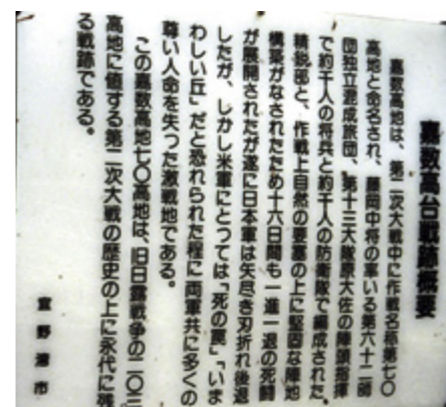
4月14日～18日、米軍に占領された読谷の北飛行場に日本軍は特攻攻撃をしかけ、迎え撃つ激しい対空砲火が無数の光の線になった(写真カラー化：東京大学大学院 渡邊英徳研究室／出典：アメリカ公文書館)



『沖縄県平和祈念資料館総合案内』を参考に作成

その結果は、想像をこえた地獄の体験でした。

日本軍の死に物狂いの抵抗でアメリカ軍にも多くの犠牲者が出ましたが、嘉数集落の住民も半分以上が命を落とし、152戸のうちの3分の1の家庭が「一家全滅」しました。



現在の嘉数高地にある戦跡説明(撮影：安斎育郎)



爆雷箱を背負った肉弾攻撃で、米軍に撃ち殺された少年兵(写真提供：沖縄県平和祈念資料館)



2月15日に第32軍司令官牛島満が軍民に出した「戦闘司令」の原本(『那覇百年のあゆみ』から／資料提供：那覇市歴史博物館)

最後の戦い

1945年6月



6月22日、真栄平で、日本軍の砲弾がさく裂する中をすすむ米軍戦車。日本軍最後の組織的戦闘だった(写真カラー化：東京大学大学院 渡邊英徳研究室／出典：アメリカ公文書館)

1945年6月にはいと、降りつづいた豪雨も上がり、戦場にも青い空が戻ってきました。しかし、それとは裏腹に、沖縄本島南部で戦う日本軍は、ますます絶望的な様相を見せていました。アメリカ軍は、重戦車・火炎砲戦車・曲射砲・艦砲射撃・機関銃・小銃・自動拳銃など、ありとあらゆる武器を使って日本軍に攻撃を加えました。大量の砲弾を雨あられと打ち込む一方では、

日本の兵隊が潜む壕の入り口で待ち構え、出てきたところを射殺するような作戦も展開しました。

5月下旬には、大田司令官が指揮していた海軍の部隊も、持ち運べない大砲や重機関銃などを破壊して小禄半島から島尻地区に退きました。牛島第32軍司令官は「作戦計画と違う」として大田司令官に戻るよう命じましたが、自ら武器を破壊して撤退した海軍部隊にもはや戦う力はありませんでした。6月12日、アメリカ軍の猛攻撃の中で、大田司令官は270人ほどの兵士を壕内に

に整列させ、「天皇陛下万歳」を三唱して自決しました。同司令官は、死を前に東京の海軍次官あてに、「軍がほとんど県民に配慮できない中で、県民は青壮年のすべてが防衛召集され、残る老幼婦女子は家や財産を焼かれ、貧しい生活に甘んじて戦った。後世、沖縄県民に特別の配慮をしてほしい」という趣旨の長い電報を打ちました。

6月半ば、喜屋武半島の丘陵地帯を攻撃していたアメリカ軍は、頂



豊見城にある旧海軍司令部壕のいまの写真(写真提供：OCVB)



沖縄本島南部(島尻地区)

煙幕弾を投げ、壕にかくれているかもしれない日本軍をいぶし出す米兵(沖縄県公文書館所蔵)



上から飛んでくる日本軍の砲弾に悩まされていました。多数の住民が犠牲になり、予座の集落では900人弱の住民の3分の2が死にました。真栄平の集落でも、約900人の人口のうち60%以上が犠牲になりました。とくに、アメリカの火炎砲戦車の威力は大きく、1日3万リットル近い「燃えるガソリン」を日本軍の陣地に流し込みました。ここでも、住民が日本兵に壕から追い出されたり、殺されたりしました。

6月22日、真栄平と宇江城の日本軍が戦闘を停止し、日本軍の組織的抵抗は終わりました。アメリカ軍が読谷海岸に上陸して83日目でした。



6月13日、サトウキビ畑にひそむ日本兵を掃討する米兵(沖縄県公文書館所蔵)



6月12日、射殺された女性。看護挺身隊と思われるが、カバンには手投げ弾などが入っていた(沖縄県公文書館所蔵)

沖繩戦の終結

1945年6月22日に摩文仁の日本軍が抵抗をやめたのを最後に、沖繩戦は事実上終わりました。翌23日、牛島満司令官と長勇参謀長は洞穴で自決しました。牛島司令官は、4日前の6月19日、「刀折れ矢尽き、軍の運命も終わりに近い。通信連絡も絶えようとしている。今後はそれぞれの場所で上級者が指揮をとれ」という意味の命令を出していましたが、もはや日本軍に組織的な戦闘能力はまったく残っていませんでした。アメリカ軍は、各地に残された日本兵の抵抗をおさえるために掃討戦を続け、7月2日になって「沖繩作戦の終了」を宣言しました。そして、生き残った沖繩守備軍とアメリカ軍の間で降伏調印式がおこなわれたのは9月7日のことで、これが沖繩戦の最終的な終結の日となりました。

沖繩戦が終わった日をいつにするかについては、四つの考え方があります。

第1は最後の命令が出された「6月19日」とする考え方で、いわば「組織的な抵抗が終わった日」です。

第2は司令官が自決した「6月23日」とする考え方で、現在は沖繩では「慰霊の日」とされ、公休日です。

第3は「7月2日」とする考え方で、アメリカ軍が「沖繩作戦の終了」を宣言した日です。

第4は「9月7日」とする考え方で、アメリカ軍と沖繩守備軍の間で「降伏調印式」がおこなわれた日です。

沖繩戦が終わるのには長い時間がかかりました。その理由は、日本軍が「本土決戦の準備のため、沖繩ででき



6月21日、占領した喜屋武半島の荒崎に、星条旗を掲揚する米兵(写真カラー化:東京大学大学院 渡邊英徳研究室/出典:アメリカ公文書館)

6月25日、米軍に投降する「白旗の少女」比嘉富子さん(写真カラー化:東京大学大学院 渡邊英徳研究室/出典:アメリカ公文書館)



9月5日、高田利貞少将が持参した降伏要件を読むルイス大佐。この二日後に降伏文書の署名がおこなわれた(写真カラー化:東京大学大学院 渡邊英徳研究室/出典:アメリカ公文書館)

るだけ長くもちこたえる」という「持久戦法」をとったためです。その結果、おびたしい県民の犠牲を生み出しました。また、アメリカ軍が多くの犠牲にもかかわらず沖繩にこだわったのは、それが軍事的に見て重要な地理的条件を備えていたからです。今でも沖繩がアメリカ軍の基地の島になっているのは、そのためでもあります。



かくれ場所から出てきて捕虜になった男性。住民の服をきた日本兵もいた(写真提供:沖繩県平和祈念資料館)



6月23日に沖繩・摩文仁の丘の洞穴で自決した第32軍の牛島司令官・長勇参謀長の墓標が6月28日にたてられた(写真カラー化:東京大学大学院 渡邊英徳研究室/出典:アメリカ公文書館)



4月、赤ん坊の泣き声で見つかり、米軍に投降する女性。この壕には11人かくれていた。沖繩戦初期には投降して助かる住民も多かった(写真提供:沖繩県平和祈念資料館)